

詩歌・小説の中のはきもの (第20回)

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

187 靴ありて 足のしあわせ

新藤兼人

★『ひとり歩きの朝』の「靴の記憶」から。米寿の祝いにシナリオ協会から贈られた靴が届けられ、箱に収まった靴を見て、新藤は「なぜか女性的な感じがして、恥じらいながら目を伏せているように思えた」という。欧米の夢分析などでは靴は女性の象徴と理解されているが、愛妻乙羽信子を喪った人には、たしかにそうも思えたらう。“靴”あってこそ“足”の幸せはあるのだ。

188 軽い日も重い日もある朝の靴 尚義 妻何も言わず昨夜の靴磨く 秀史 働いていただく朝の靴みがく 安重 一日の苦斗へ朝の靴光る 静夫 一日を縛られて行く朝の靴 甲太

★『川柳博物誌(北原晴夫編)』から。靴は朝と昼、それに夜では全くちがった表情をみせ、重さまでちがって感じられる。川柳はそれをもっとも鮮明に描いている。オリンピックでマラソンの野口選手はゴールインした後、シューズにキスをしたが、朝、玄関に立ったら、「今日もよろしく」と靴に一声かけてご覧なさい。あとは黙っていても靴は快調に歩いてくれる。靴と仲良くして下さい。

189 日本から履いていった靴が駄目になったので、ケンブリッジ大学の近くの靴屋に入って、あれこれと物色したあげく、足に合いそうな靴を見つけて椅子に座っ

た。前にある足台に靴をのせて、傍らの店員に「靴ベラを」と催促した。すると驚いたことに、店員はそんなもの置いていないと言うではないか。

鈴木孝夫

★『日本語と外国語』から。イギリス人が靴を脱ぐのは寝室だけ。靴を履くときは靴紐を緩めて足入れする。靴屋で靴を買うときも同じ。普通、靴に紐は通されていず、バックヤードから出してきて、この靴を履くのはあなたが初めてですと言わんばかりに、目の前で手早く紐を通す。日本で外国製品を輸入する場合は、輸入したあと、私たちが靴紐を通して小売店に卸していた。

190 跪射俑の場合、くるぶしまでの浅めの麻履を履いている。左足を立て、右足を跪いているので、右足の靴裏が外側に現れている。そこには私たちの靴と同じような滑り止めが施されている。三分割され、場所によって丸い突起の数が異なる。…土踏まずの部分には大きめでまばらな丸が並ぶ。ある跪射俑では一行11から13までで全部で140~142ある。かかとの部分やつま先の部分には、小さめな密集した丸が隙間なくぎっしりと刻まれている。土踏まず部分より狭いながらも250ほど丸が並んでいる。

鶴間和幸

★『始皇帝陵と兵馬俑』から。2200年前、中国を統一した人物の墳丘から現れた、石弓を発射する兵士の靴の裏を克明に知ることができるというのは奇蹟のようなもので

ある。立人俑ばかりであったらここまでは分らなかった。日本の絵図にも靴底は描かれていないし、埴輪にも靴底の詳細を刻んだものがない。

191 アンドレの小屋をたずねると、アンドレは干物のようにやせ細って、古いブーツをかじりながら、やっと生きのびていました。ブーツは皮でできているから干肉と同じで、食べて食べられないことはないけれども、けっしておいしいものではありません。それに硬くて胃にいいわけでもありません。それでも飢え死にするよりはましなので、必死に口に押し込んでいました。

堀田勝彦

★『それからのシンデレラ』から。靴を食べるといったら、映画〈黄金狂時代〉がダントツに有名だ。チャップリンは、金鉱をもとめて雪の原野で餓死しかかり、最後に靴を煮る。チキンに見立てた靴の紐はスパゲッティ、釘は骨のように抜き上品に食べる、どん底に追い込まれた男の悲しいおかしさ。私はあの映画を見ると、自分たちにはいざとなれば、“売る”ほどの靴があるのではないかと妙に気色ばんでしまう。

192 紋章学を学んだときに、毛皮の深い意味を知った。すなわち紋章学では、毛皮模様は王侯貴族のシンボルであり、その関連からいえば、もともと王子が靴に注目したのは、ガラス製だからではなく、王侯のみに使用が許された「銀リス」製のものだったからである。

浜本隆志

★『モノが語るドイツ精神』から。ペローやグリムの書いたシンデレラのガラスの靴はもともとは「リスの皮」(vair)であったものが、発音の似た「ガラス」(verre)になったものだという。王子はシンデレラの美しさに魅かれたとばかり思っていたが、筆者は「毛皮の靴をはいた者は、高貴な王女であるという王子の思い込みがあった。それがこのメルヘンのベースにある」

ことに注意を喚起している。童話にはこのような深い秘密を持った話が多い。

193 「…買わずば損、という観念が支配している。そこらじゅうの靴を一々手にとる。ショーウィンドウのも取りださせる。はいてみると、大きすぎる、だの、小さすぎる、だのと言う。ついに店員は、ハシゴをかけて、棚の一番上の靴まで取りだしてくる」

「想像するだけで疲れるな」

「現実の疲れ方はもっと大変だ。大体、男の買物は早い。靴を五足取りださせたら、その中の一つを買って、それで済んでしまう。ところが女はそうじゃない。あるだけの靴を調べて、気に入ったものがないと、次の店へ出かける。これがエンエンと繰り返される。女房を香港へ連れて行ってならない理由が、これでわかるだろう」

北 杜夫

★『高みの見物』から。六足も七足も売場のフロアに靴を並べさせてしまうのは、店員の接客技術にも問題があるからである。よく観察していると、店員に決めてもらいたがっているというのが判るお客様もいる。だが、このよう文章に登場する女性のような真正“目移り症候群”的な人も決して少なくはない。北さんの言う通り、確かに、私もかつての接客を思い出すだけで疲れてしまいました。

194 外反母趾が年々ひどくなり、愛蔵の靴ははけなくなった。大事に大事に十年はいた靴、おろしていない靴もふくめて、はける人をみつけてさしあげた。それでも、どうしても愛着があつて手放せない何足かがのこっている。その一足が、フィレンツェ入手のパンプス。意地になって買ったのではなく、惚れこんで、やっと手に入れた手作りの美しい一足の靴。誰もこの靴にまつわる小さな物語など知らない。…わたしは冒険をするような気分で、この靴を買ったのだと思う。

澤地久枝

★『家計簿の中の昭和』から。博士号を持つ製靴会社社長の書庫の整理を依頼されてお手伝いしたことがある。「残しておく価値のないものを選択して欲しい。それから君が欲しい本があれば上げる」ということだったが、「この仙花紙本、神田の百円均一に並んでいます。処分してはどうですか」と助言すると、「それは戦後、岩波書店に行列して手に入れたものです…」などと一冊ごとに、羨ましくなるくらい聞けば長い物語があり、本を貰うどころの話ではなかった。身の回りに“物語”のある靴を持つ人の幸せを思い見るべし！

195 「梅津から送って来たのよ」

「結構な靴ですね」

「ふん、あわてて、とりちがえたんだわ」

「大きいようですね、少し」

「あたしのサイズは、ちゃんとノートしていった筈よ。まちがえる筈はないのよ。細君へいくのと、あたしのところへ来るのと、とりちがえたにちがいないわ。間抜けね」

立ったまま、靴を抜いた、足の先でほうりだした。

丹羽文雄

★『女靴』の冒頭。物資払底で国内で革靴が手に入らなくなっていた戦中の話。外国から愛人に送った靴を、事もあるうに細君のサイズと取り違えていたのである。花やチョコレートを贈るのとはわけが違う。靴を贈るのは細心の上にも細心でなければならない。だから、靴をプレゼントされた人は他の何を贈られたよりも喜んでよい。有頂天になったとしても、不自然ではない。

196 ザーラにはあのピンクの靴が自慢だった。おしゃれのできる唯一のものが靴なのに、その靴がない。ザーラは悲しくて涙が溢れそうになり、あわてて外に出た。階段を下りて靴置き場を見て、彼女はまた溜め息が出た。アリの靴は汚れていて、白いはずがねずみ色になっている。

フジド・マジディ

★『運動靴と赤い金魚』から。妹ザーラの甲にリボンのあしらわれたベルト付きのピンクの靴の縫い目が裂けてしまったので、修理しそれを持ち帰る途中失くしてしまった兄のアリが、自分も一足しか持っていない運動靴を殊に貸す。学校を休むわけにはいかないので、ザーラはしぶしぶアリの靴を履くというシーンである。折りしも学校のマラソン大会があり三等の賞品はスニーカーと発表された。アリは運動靴を履いて妹のために大会に参加。団子レースを必死に走って、気付いたら一等になっていた。賞品は運動着上下、彼の履いて走ったけなしの運動靴は穴があいてしまった。最後の一行のドンデン返しをここに記すわけにはいきません。

